法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-02

2022年度FICオープンセミナー ：「長沼節夫『ジャーナリストを生きる』から学ぶもの」

髙柳, 俊男

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
異文化 / Bulletin of the Faculty of Intercultural Communication : Ibunka
(巻 / Volume)
25
(開始ページ / Start Page)
131
(終了ページ / End Page)
132
(発行年 / Year)
2024-04-01

2022 年度 FIC オープンセミナー

「長沼節夫『ジャーナリストを生きる』から学ぶもの」

髙柳俊男

長野県飯田市出身で、東京の飯田ふるさと大使を務め、朝鮮関係をはじめ、国際的に活躍した硬骨のジャーナリスト長沼節夫（1942 〜 2019 年；敬称略）について、『ジャーナリストを生きる：伊那谷から韓国・中国そして世界へ』（458 頁）が 2022 年 8 月、南信州新聞社から刊行された。

この本は、長沼節夫の人生の諸段階で関わりのあった、複数の関係者が力を合わせることで陽の目を見た。首都圏に住む飯田高校卒業生などの同郷人、長沼の京都大学時代の寮生、志を同じくするジャーナリスト仲間、そして SJ 国内研修等でお世話になってきた髙柳などで、髙柳が『南信州新聞』に寄せた追悼文で遺稿集刊行の提唱をしたことが直接的な契機となった。長沼が本名ないし筆名で生涯に著した膨大な文章から､郷里への想いが伝わるもの、学生時代に『京都大学新聞』に載せた初期作品、ライフワークとした金大中をはじめとする朝鮮関係の論稿、国際ジャーナリストとしての側面を伝える記事、そして映画評や短歌など文化関係の諸作品を抄録している。未収録のものの一部は付録の DVD に収めており、その点でユニークな編集方針と言えよう。

今回の FIC オープンセミナー「長沼節夫『ジャーナリストを生きる』から学ぶもの」は、本著作集刊行を機に、長沼節夫という人物の歩みを再度振り返り、そこから何を汲み取るべきかを考える場として設定した。同様の趣旨ですでに 2022 年 11 月 19 日（土)、コロナのため遅れていた「偲ぶ会」が学外で開催された。「偲ぶ会」が個人を追悼し、讃える側面が強かったのに対して、今回は長沼節夫の論稿や生き方をより客観的・学問的に位置づけるべく試みた。具体的には、各章の担当者から、章の編集方針や内容、その読み込み方などについて語ってもらい、それを議論の前提とした。

ついで、長野県出身の五味洋治氏（東京新聞論説委員）に、本書や長沼節夫の生き方から受け継ぐべきものを、外部の目で語ってもらった。自身もコリアウオッチャーである五味洋治氏は、長沼の韓国・朝鮮論を中心に取り上げ、早い段階から金大中と親交を結び、弱者への視点を忘れないなど、その歴史的意義を評価すると同時に、北朝鮮への批判的視点が弱いなど、時代的制約を率直に語った。zoom 参加者との意見交換も含めて、本書や長沼節夫という人物をより客観化し、課題を自分たちにも課されたものとして捉え、次の時代へとつなげていく意味で、良き場となった。

なお、この FIC オープンセミナー「長沼節夫『ジャーナリストを生きる』から学ぶもの」

は本来、2022 年 12 月 10 日（土）に開催される予定であったが、主催者の髙栁の急な体調不良から、急遽この日に延期された。

・日時：2023 年 1 月 28 日（土）15:00 ～ 18:00
・会場：zoom によるオンライン
・参加方法：メールによる事前申込み制
・参加人数：約 30 人